

59

17世紀後半における怪物（奇形）の原因について

—ニコラウス・ステノによる病理解剖—

安西なつめ

順天堂大学医学部解剖学・生体構造科学講座

16世紀には、妊娠中の母親の想像力（*imaginatio*）が奇形の原因になると信じられていた。この点は医学的にも考察され、外科医アンブロワーズ・パレ（Ambroise Paré, 1510–1590）は、子宮の大きさや精液の量に加え、母親の想像力を怪物（奇形）の一因に挙げた。パレ以降は、ルーヴェンで医学教授をつとめたトマス・フィエヌス（Thomas Fienus, 1567–1631）が、著書『想像力の力について *De viribus imaginationis*』（1608）の中で、母親の想像力が精気や体液の運動を通じて胎児に影響を与える仕組みを考察した。彼の著作は17世紀を通し、ライデン（1635）やアムステルダム（1658）など各地で再版された。胎児に影響を与える母親の想像力は、続く17世紀後半の医学においてどのように理解されたのだろうか。17世紀後半に活躍した解剖学者ニコラウス・ステノ（Nicolaus Steno, 1638–1686）を例に考察する。

ステノは解剖学関係の論考を31作残している。そのうち、怪物（奇形）を表す *monstrum* の語は7作で使用され、唾液腺の異常な腫れや肝臓の著しい増大を示す場合などに用いられた。7作のうち、特に『パリにおける奇形の胎児の解剖 *Embryo monstro affinis parisiis dissectus*』（1673）及び『水頭症の子ウシについて *De vitulo hydrocephalo*』（1673）は奇形を主題とした論考であり、奇形の原因に対する当時の理解とステノの見解が現れている。

『パリにおける奇形の胎児の解剖』は、ステノがパリ滞在中に解剖した1体の奇形児の所見である。1665–68年頃に執筆され、文章のみで図版はない。3項からなり、後にトマス・バルトリン（Thomas Bartholin, 1616–1680）の『コペンハーゲンの医学・哲学紀要 *Acta medica et philosophica Hafniensia 1671–1672*』（1673）に収録された。この論考は現在ファロー症候群として知られている病態を、ファロー（Etienne-Louis Arthur Fallot, 1850–1911）に先立って最初に記録したことで知られている。ステノはこの論考で、心奇形、口蓋裂・唇裂（兔唇）、合指などに加え、臍帯ヘルニアと思われる所見を記録した。唇裂（兔唇）については、妊娠中にウサギを食べようと欲したためだとする母親の見解が紹介されており、胎児の奇形に母親が影響を与えるという考えが一般に浸透していたことが伺える。しかしステノ自身は奇形の原因についての考察を控え、所見のみを記録した。

一方1669年執筆の『水頭症の子ウシについて』では、奇形の原因について考察している。ステノは水頭症の子ウシ1体の頭部を解剖し、頭部膨張を呈する水頭症の病態を正常例と比較した。彼は疾患によって脳室に液体が貯留することで著しい外形の変化（奇形）が生じることを説明し、こうした外形の変化（奇形）は母親の想像力によるものではなく、しばしば胎児自体の疾患に原因すると指摘した。

17世紀後半において、想像力とその働きについては医学においても関心が寄せられていた。ステノは『カオス手稿 *Chaos-manuscript*』（1659）と呼ばれる研究ノートの中で、フィエヌスの『想像力の力について』に言及している。そのためステノは、母親の想像力と胎児の形成に関してフィエヌスを踏まえていたと考えられるが、奇形に対するステノの考察方法は、フィエヌスやパレのものとは基本的に異なる。ステノはそれまで奇形の原因と信じられてきた母親の想像力を不確かな要因として退け、解剖結果を正常例と比較して原因を考察する病理学的なアプローチを重視した。